

次の企業と FIVE STAR MAGAZINE は士業界を応援しています。

Powered By
ご協賛企業



ストライク

NOTHING IS
impossible

データ検証企画

士業事務所の 働き方 「実態」

分析

士業事務所のための経営専門誌

The Magazine for Professional Firms

オオノ!!

連載

“I can't believe
ChatGPT
can do this!”

こんなことまで できるなんて!

取材／セブンセンス税理士法人（東京都港区）
ディレクター 公認会計士・税理士 大野修平氏

第5回 取材日

2025.8.8

このまま ChatGPT が進化すれば、士業を始めとするホワイトカラーの仕事は奪われていく——!? そのことに危機を感じた我々は、“税理士業界における ChatGPT の第一人者”大野修平氏とともに、ChatGPT の進化の動向をウォッチしていくことにした。ChatGPT の進化は止まらない。それどころか早まるばかりだ——

オオノ!! なんてこった!!

(文・武田司、GPT o1 pro)

生成 AI で、アプリを自動生成

—実は今月号の特集は、「ChatGPT の活用事例」にしようと考えていたんです。士業でどういう使い方をすれば、生産性が上がるのか?といったところをテーマに特集を作ろうと考えていたのですが、現実にはまだまだ用途は限られていて、文章の下書きや壁打ち相手、チャットボットの的な利用の仕方に集約されるのではないかと考えて取りやめました。それを聞いて、大野先生はどう感じますか?

大野: 生成 AI という文脈で言えば、最近皆が急に取り組み出したのがアプリ開発です。

ちょっと、この画面を見てください。これは ChatGPT ではなく「Google AI Studio」というものなのですが、AI Studio は Google が

開発している生成 AI の「Gemini」を活用できる開発環境で、これの「Build」という機能を使って、アプリを開発できるようになったんです。【写真右】

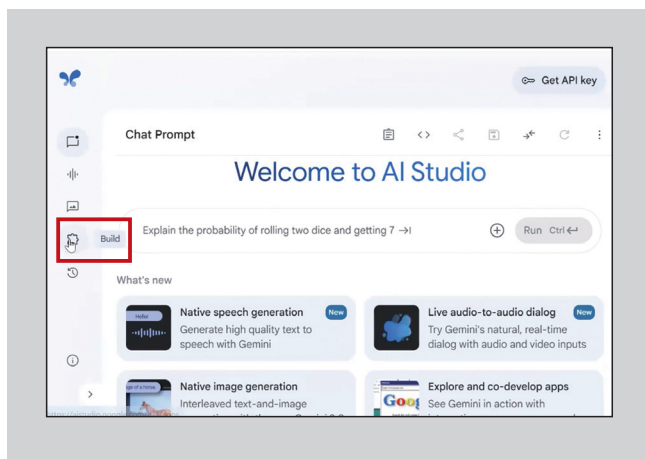
せっかくですから今、アプリを作成してみましょうか？

一えっ？ そんなにすぐに作成できるのですか。

大野： そうなんですよ。適当に作りたいアプリについて指示を与えると、このようにアプリの作成方針を考え始め、作成を始めます。【写真下】

まずアプリ開発のステップをプランニングして、キーとなるファンクションを確認し、ロジックをマッピングしながら、最後にディテールを詰めて作成方針が決まると、今度はコードの作成が始まります。ここまで、ユーザーは何もすることはありません。作成されたコードの内容もユーザーは（理解できた方がよいのでしょうけど）理解する必要はありません。

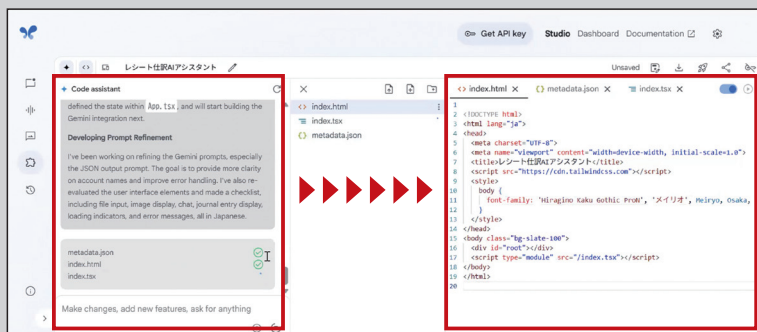
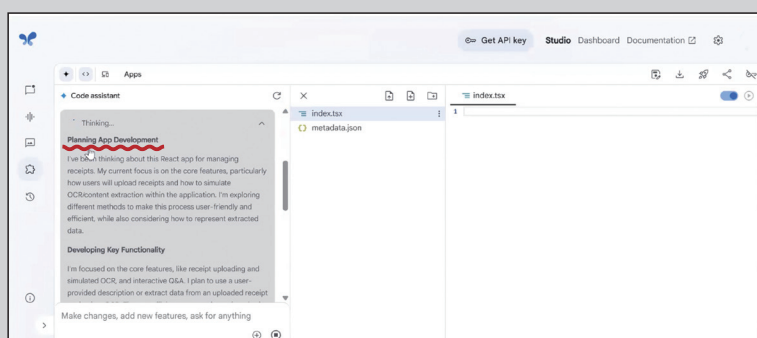
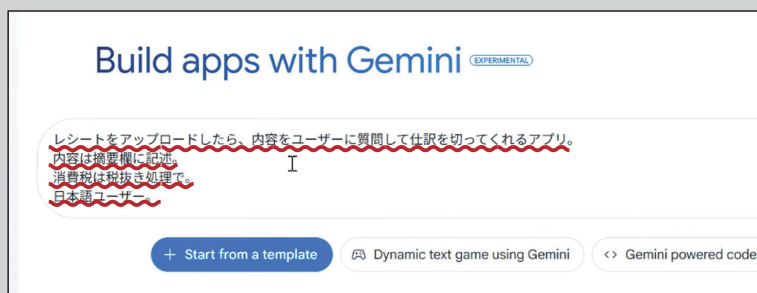
作りたいアプリの説明をすると、AI Studio が必要な機能やロジック、インターフェース



までを含めて自動で検討してアプリを作成してくれるのです。

一しかも、検討して結論を出すまでがめっちゃくちゃ早いですね。

大野： あ、今、エラーが2つ見つかったと言って、それを直しに行っていますね。これもすこし不思議な感じなのですが、エラーを自分で見つけれられるなら最初からエラーを出すよ



うなコードを書かないでほしいのですが、それも含めてすごく人間的なんですね（苦笑）。

それで、出来上がったものがこれです。**【写真】**

—コードを生成してアプリを作るという意味では、ChatGPT の GPTs とはまったく異なるものですか？

大野：いいえ。GPTs もやっていることは同じです。同じ処理を ChatGPT で行えないかと言えば、行えます。ChatGPT はコードを明示的に作成しませんが、GPT が自動で考えて処理していきます。AI Studio は、アプリ化するためにコードが必要になるということです。

その中で ChatGPT との違いは、AI Studio がインターフェースまで生成してくれる点にあります。インターフェースまで作成し、既存のアプリっぽく見せてくれるところが大きく異なっています。

—プログラムコードにするわけだから、処理の再現性が高まるということですか？ GPTs だと同じ作業を頼んでも、ある時はできて、ある時はできないということがよくありますよね。

大野：それは、AI Studio のアプリでも同じです。

同じなのに、なぜこれがすごいのかと言うと、私たちがアプリを使うことに慣れているからです。慣れているから、使うときに安心感がありますよね？

—あー、なるほど。確かに、そうですね。

大野：ChatGPT や GPTs も、あれだって一つのアプリです。ただ、チャットアプリの UI（ユーザーインターフェース）になっているのだけど、ChatGPT はいろんな指示を与えることができるので、ユーザーはどこか不安を感じながら使っています。

でも、今作った仕訳アプリならレシート画像をアップするボタンしかなく、それしかできないので、考える必要がなく安心して使えますよね。

—いろんなことができてしまうからこそ、どう使えばよいか分からなくなってしまうんですね。

大野：そうですね。ただし、AI Studio も生成 AI なので、うまくいく場合とそうでない場合があります。

だから、エラーがあまりに頻発してうまく軌道修正できないようだったら、再度ゼロから作り直した方が早いケースもあるんですよ。

—そこは生成 AI だから、ChatGPT と一緒なんですね。

大野：生成 AI はいったん方向性を決めてしまうと、間違っている点を指摘してもうまく軌道修正できないことがあります。

まず第一に、私たち非エンジニアはプログラミング言語を理解できないために、生成 AI が作成したコードを確認して間違いを正しく指摘することができません。

それにそもそも、人間が出す指示や説明には大抵どこかにモレや欠落、あるいは、明確になっていない部分があったりします。そうしたモレや欠落、不明瞭さを生成 AI は自分で補いながら解決しようとしていきます。すると、そこに生成 AI の“思い込み”が発生してしまい、その思い込みから抜け出せなくなってしまうのです。

それだったら新しいチャットを開いて一旦リセットした方が、彼らも頭の中をリセットしやすくなると思います。

相手を深く知ることが、「正しい交際」の第一歩

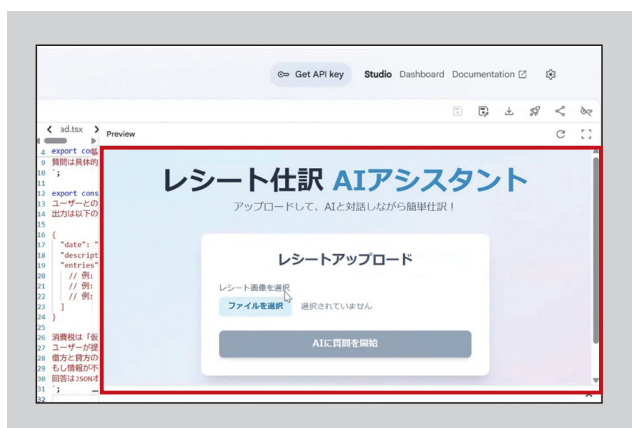
—確かに、こうやってアプリ化してくれると使いやすくなりますね。

大野：そうですね。アプリになると、みんなが使えるものになります。でも、私はこれって怖いことだと思っています。結局アプリにしないと、みんな生成 AI を使わないということなんですよ。

それでいて、アプリになってみんなが使えるようになると、みんな欲しがらないですか。こうした構造はすごく問題だなと感じています。

—それはどういうことですか？ アプリを使っているだけなら、結局これまでの世界線と変わらないってことですか？

大野：そうですね。それって結局、生成 AI を使っていないのと同じことじゃないですか。大切なのは、普段から生成 AI に触れて、生成 AI の得意、不得意を知り、でも、その1か月後に「あれ？ できないと思っていたのにできるようになってる」という経験を重ねていくこと。そうしていかないと、私たちが AI を活用していく未来は見えてこない



ですよ。

—生成 AI を生産性向上に活用できないということですね。

大野：誰かが作ったアプリやシステムを購入して使用するだけだと、自社の業務をどのように改善するのか、事務所をどう変革するべきか、そのために必要なのはどのような人材か、どのようなサービスを開発すべきか、そしてこれからの税理士はどう変わっていくべきなのか。こうした問いに用意されたアプリを使うだけでは答えられず、変化に対応することができなくなってしまうと思うんですよね。

—なるほど。生成 AI を活用しながら「人の革新」を起こしていかなければならないということですね。

大野：生成 AI で先端を行く人は今、アプリを作っていますけど、そうしたアプリの性能が向上して有料化されるようになると、また新たな課金が発生して、我々は搾取され続けることになります。

結果として、AI を使いこなす側に仕事を奪われる構図が強まります。これは私が以前から言ってきた状況が、より現実味を帯びてきたということですね。

—アプリ開発が容易になったことで、その流れが一層加速するということですね。

「大丈夫、あなたもニュータイプでしょ？」

—先日、日経新聞の一面に、AI 開発者で著名な人物が「そもそも大規模言語モデル (Large Language Model, LLM) には根本的な限界がある」と指摘したという記事が掲載されていました。人工知能の開発において、大規模言語モデルというアプローチ自体が誤っているという内容でしたが、その点はどうお考えですか？

大野：さまざまなアプローチがあると思っていて、現状は多くの企業が LLM を採用して

いますが、当然ほかのアプローチもあると思います。別のアプローチのものでも皆が使いやすいサービスになれば、多くの人が利用するようになると思います。

ChatGPT も 3.5 でチャットアプリという誰もが使えるインターフェースになって公開されたから、一気に広まりました。自然言語で対話して、「AI はもっともらしい嘘をつく」などと言われながらも、あっという間に利用者が増えました。ですから、エンジニアだけでなく、多くの人が気軽に使えるようにすることが重要であるように思います。

—同じ質問をしても、同じ答えが返ってこない。LLM ではそういう構造的な欠陥があるように感じますが、これらの問題はモデルが上がっていくことで解消されるものですか？

大野：ゼロになるロジックではないので、ゼロにはならないと思います。でもゼロにならないからダメかと言われたら、そもそもゼロにする必要なんてないと思います。

—それは人間がやっても、ミスはゼロにはならないからだということですか？

大野：そうですね。人類が 10 億マイル運転するとおおよそ一人の確率で、交通事故の死亡事故が起きると言われています。自動運転を採用するなら、その確率を下回ればいいだけですよ。

ゼロにしようとする大変だと思いますが、人間がミスを犯す確率を下回ればいいだけなので、そもそもゼロにする必要はありません。

税務では、AI が申告した内容が間違っていた時に誰が責任取るんだ？という議論が必ず上がります。でも、間違っただけで責任を取る必要があるのは過失があるときだけです。過失がなければ誰にも責任はありません。

人間より運転が上手な自動運転の車の映像は、すでに YouTube などにたくさん公開さ

セブンセンス税理士法人
(東京都港区)
公認会計士・税理士、ディレクター
大野修平

大学卒業後、有限責任監査法人トーマツへ入所。金融インダストリーグループにて、主に銀行、証券、保険会社の監査に従事。トーマツ退所後は、資金調達支援、資本政策策定支援、補助金申請支援などで多数の支援経験を持つ。また、スタートアップ企業の育成・支援にも力を入れており、各種アクセラレーションプログラムでのメンタリングや講義、ピッチイベントでの審査員や協賛などにも精力的に関わっている



れています。私は仮に自動運転の車同士が衝突しても、責任は発生しないと思っています。人間は脇見運転や一時停止無視などによって事故を起こすので過失割合を争いますが、そもそも自動運転は脇見運転や一時停止無視をしません。飲酒運転もたぶんしないと思います（笑）。ですから過失は起きないので、責任は生じない。もちろん損害は発生しますが、損害は保険で補償すればよいだけなので、誰がどれだけ悪いという議論はなくなります。

それと同じことが今後、税務申告などでも起こると思います。

—一方で、私も ChatGPT を利用していますが、困惑することがあります。ChatGPT に誤りを指摘すると「理解しました。今後は誤りを避けます」という返答が返ってきますが、再度実行させると再び同じ誤った処理を行い、それを繰り返します。人間にもまれにそういう人がいますが（苦笑）、一般にそういうことは起きません。あれは、どうしてそういう現象が起きるのでしょうか？

大野：一つはモデルの問題でしょう。例えば o3 であれば、そのような事象はほとんど発生しません。しかし 4o では、同じ誤りを繰り返す、再度指示しても修正されないといったケースが起きますね。

4o や 4.5 は反応が速く機動力も高い万能型です。一方、o3 や o1 など「o」で始まる推論モデルは慎重に処理するため挙動は遅いものの、極めて丁寧に考えて処理をしますので、そのような間違いは起こしにくくなっています。そのため、しばらくはモデルの使い分けが必要なのだと思います。

—なるほど。そうしたことも実際に使用していないと分からない点ですね。推論モデル群が万能型へ進化して速度も向上すれば、さらに活用範囲が広がるわけですね。

大野：おそらく OpenAI 社は、推論モデルと

4o 系の瞬発力モデルを統合するか、あるいは目的に応じて自動切替する仕組みの実現を検討していると思われます。生成 AI が進化していけば、利用者が細部の違いを意識せずとも利用できるようになっていくでしょう。

しかし現状では利用者側が判断、峻別しながら、付き合っていく必要があると思います。

—「付き合う」ということで言えば、先ほどの Google AI Studio のインターフェースにはある種のとっつきにくさを感じました。それでも使っていったほうがよいものでしょうか？

大野：確かに見た目は、そうですね（苦笑）。でも、アプリ作成に関しては、最初に入力できれば以降に作業することは特にありません。

私もすでにいくつもアプリを作成していますが、まずはおもちゃのようなアプリを作ってみてはいかがでしょう？

私は息子に「2 直線が平行なとき、『錯角（2つの平行線とそれらを交える 1 本の直線によって作られる角のうち、内側で互いに対向する 2 つの角）』は等しい」ことを説明するためにこんなアプリを作ってみました【写真】。アプリ作成時は「ハンドルをドラッグして、錯角が等しくなる様子を視覚的に理解できるアプリを作成して」と指示しただけです。最初はこんなものでもいいと思います。—とにかく、実際に生成 AI に触れて使用してみることが重要だということです。

大野：そうですね。いろいろ触って、さまざま試行錯誤して、徒労に終わることもありますが、成功したり、生成 AI への理解が深まったりすることもあります。

そうやって、生成 AI を使いこなしていく先に何が起きるか分かりませんが、何がどうなるのか分からないからこそ、現時点では積極的に使って、使いこなせるようになっていくことが必要ではないかと思っています。■

